

## ▼美術展▼

など選抜出品者と期待されているが、遺伝学的なイメージから御獄のイメージの形化へと変わった一連の作品。

県内で絵を描くようになつて三年の永津禎三が、今年も東京のグループ展二つに、同時進行で出品している。

その二つ、セントラル美術館入り組む手法はすっと統一されたが、ち密な筆づかいが

## 深まつた神秘感

(銀座二丁目)  
東京セントラル美術館、十一月十九日

は昨年一月

旗揚げした昭和第三世代と

もいべき若手画家のグループ展。一九三七(昭和十二)

年四一(昭和十六)年生まれと年齢からいえば少し上の

世代もいるが、大体一九四〇

年後半から五十年代生まれ

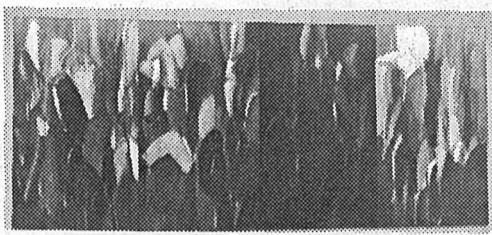
が中心。公募団体展所属者は二紀、独立モダニズム、新制作、図画、現代日本美術

展などを洋画、今活力がある團

員会友クラブ。無所属作家も安井賞、シェル美術賞

永津禎三さん東京の2展に

（東京）



永津禎三「UTAKI」

が、二十一世紀へ向かう日本社会の種々相、精神の断面を確実に描き出し、共感を与える雰囲気があった。

いま一つのケルビーム展（銀座七丁目画廊ケルビーム、十一月十六日）九人の仲間ともに展示している永津作品

三百点は、題材は発展と同じ小品。板に描いた形象、生物の骨の断面を思わせる硬質な味わいが残る中に詩がある。

のではない

時代の最先端を行くという

会場は、多様な作品が、

を行くといふ

が、二十一世紀へ向かう日本社会の種々相、精神の断面を確実に描き出し、共感を与える雰囲気があった。

いま一つのケルビーム展（銀座七丁目画廊ケルビーム、十一月十六日）九人の仲間ともに展示している永津作品

三百点は、題材は発展と同じ小品。板に描いた形象、生物の骨の断面を思わせる硬質な味わいが残る中に詩がある。